

---

特定非営利活動法人 地球宇宙平和研究所

# ニューズレター

Institute for Global and Cosmic Peace IGCP Newsletter



---

第9号

2005年10月1日

---

## もくじ

### 巻頭言

- ・人間を信頼し、友情の輪を広げよう！  
朝鮮と中国への訪問を終えて ..... 中西 治 ..... 2

### 特集 訪朝・訪中

- ・旅行を終えて ..... 木村 英亮 ..... 3
- ・北朝鮮経済雑感 ..... 清水 学 ..... 4
- ・友誼賓館に泊まって ..... 高橋 勝幸 ..... 5
- ・誰に対する「ファシズム」？ ..... 堀 妙湖 ..... 6
- ・二酔人四方山問答（13）～「今日のコラム」より ..... 岩木 秀樹 ..... 7
- ・訪問日程 ..... 10
- ・決算報告 ..... 11
  
- ・会員紹介 ..... 渡辺 直毅 ..... 12
- ・事務局からのお知らせ ..... 13

## 巻頭言

---

### 人間を信頼し、友情の輪を広げよう！ 朝鮮と中国への訪問を終えて

---

特定非営利活動法人地球宇宙平和研究所理事長  
中西 治（なかにし おさむ）

「私が長い人生のあいだに学んだ最大の教訓は、人間を信頼に値するものにできるのは、その人間を信頼したときだけであるということだ。人間を信頼に値しないものにするもっとも確実な方法は、その人間を信頼せず、実際に信頼していないことを示すことである。」

この言葉は第二次大戦中の米国の陸軍長官スティムソンが大戦終了直後の1945年9月11日にトルーマン大統領に原子爆弾の管理問題で送った覚書のなかで述べたものである。スティムソンは共和党员であったが、民主党のローズヴェルト大統領に請われて戦時下に陸軍長官の要職を務めた人である。

スティムソンはこの覚書でソヴェトをまず信頼せよと説いた。彼はソヴェトがいずれ、最短で4年、最長で20年以内に原爆製造の秘密を入手するであろうから、米国はいますぐにソヴェトに原爆製造の秘密を教えるべきであると主張した。

これによりソヴェトはそうでない場合よりも若干はやく原爆の生産を始めるであろうが、われわれの目的が相互に受け入れられる国際協定の締結である限り、それは守られるであろうし、文明を5年や20年ではなく、永久に救うことになるであろうと強調した。

スティムソンは当時米国が所有していた原爆を差し押さえ、今後、原爆の生産と改良を中止し、戦争の道具として原爆を使用せず、原子力の平和利用のためにソヴェトと資料を交換することを考えていた。

スティムソンのこの考えをローズヴェルトの死によって副大統領から大統領に昇格したトルーマンが受け入れていたならば、その後の世界の歴史は著しく変わっていたであろう。トルーマンはこれを拒否した。

人類は核兵器廃絶の好機を逸した。

米ソは互いに相手を信頼せず、核ミサイル兵器生産競争に突入した。

2001年9月11日の出来事は人間の相互不信が行き着いた先である。

2005年9月19日に発表された第4回6者協議の共同声明によって朝鮮半島での核戦争の危機が回避され、この地域の非核武装化が大きく前進した。

人間は朝鮮戦争、ヴェトナム戦争、アフガニスタン戦争、湾岸戦争、9・11事件、アフガン戦争、イラク戦争などの多くの過ちをおかしながらも、そこから教訓を引き出し、係争問題を平和な話し合いで解決する術を少しずつではあるが身につけつつある。

話し合いが成功する基礎には相手に対する信頼がある。

6者協議の成功は人類の将来に希望を与えるものである。

私は今回の朝鮮・中国訪問で人間を信じ、多くの新しい友人を得た。私はこの友情を大切に、友情の輪を地球全体に広げていきたいと願っている。

人間を信じること、これが21世紀以降の地球史を20世紀までの歴史とは違ったものにする不可欠の条件である。

2005年9月19日

## 特集 訪朝・訪中

特集 訪朝・訪中

---

### 旅行を終えて

---

木村 英亮(きむら ひですけ)

外国旅行の前には、その国の地理、歴史、経済、思想など一通り学ぶのが普通で、それによって成果も大きくなる。それらの知識は、旅行のなかで肉がつき豊かになる。われわれのような場合、それぞれの専門からの関心もプラスされ、また同行者からも啓発される。

今回、平壤から38度線南の開城まで高速道路で2時間、中国との国境の町新義州まで列車で4時間の距離で、北朝鮮がそれほど広くないことを実感した。また高句麗など古代史への関心の強さは、古い歴史に対する誇りがうかがえた。

ソ連研究者として、平壤の街はソ連の都市、とくに中央アジアのタシケントなどにとても似ているという印象をもった。それは、都市計画による広い街路、高層アパート群、トロリーバスや市電などの車種が同じことにもよる。また革命家や戦没者の巨大なモニュメントなどもそのような印象を強めている。タシケントは1966年の大地震で、平壤は1950-53年の朝鮮戦争で完全に破壊された。平壤にはそれ以前の跡はまったく見られない。

ソ連は社会主義ではなくなったが、朝鮮は自らのマルクス主義を「主体思想」と呼び基本においている。ソ連、中国という2つの社会主義の大国の傍らにあり、自主性を守るための苦心は大きかったであろう。日本はまだ朝鮮との国交はなく、経済的交流も細くなっている。朝鮮自体も情報を制限している。研究者にとってはこのような条件は好ましいものではないし、朝鮮の「勤労大衆の自主性の実現」のためにも人的交流の活発化が望まれる。

日本では、朝鮮を特殊な国とみる意識があるが、今回の短い訪問では普通の国であり、経済の困難について過大に見られているのではないかと感じた。もちろん一回旅行しただけではわからないが、直接行ってみることは相互理解の第一歩である。われわれの訪問が、日朝関係好転への一石でも投じることになればと思う。

---

## 北朝鮮経済雑感

---

清水 学(しみず まなぶ)

今回短期間とはいえ、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)を訪問する機会を得た。しかし短期間の訪問だけで特定の結論を出すには余りにもデータが少なく、ほんの印象論を記すにとどめたい。ケソン市訪問などを除き平壤市内の観光が中心だったからである。平壤が北朝鮮を代表しているわけではないことを知りつつも、平壤の印象で語らざるを得ない。しかし首都が北朝鮮の重要な側面を反映していることも事実である。

平壤の街のたたずまいを見てどこかで見たことがあるという感覚を持った。考えてみたらウズベキスタンの首都タシュケントである。都市計画のもとで作られた広い道路幅、巨大建物の形状、さらに地下鉄の駅が類似している。地下鉄のプラットフォームはタシュケントより幅が広い。平壤とタシュケントは明らかにソ連型都市をモデルという共通性があるためだ。平壤は朝鮮戦争で破壊された跡に、タシュケントは1966年の大地震による破壊の跡に、ソ連の支援も得て建設されたものであろう。20階あるいは30階の高層の集合住宅など高層建設物は平壤の方が多い。首都はその国の表玄関であり、廃墟からこれまで再建したのは大変な労力がつぎ込まれたものであろう。ただ街全体が何となく人工的で無機質な印象を持ったが、その原因の一つは犬猫やハトなど動物や鳥の姿をほとんど見かけなかったためかも知れない。車の数は少なく、自転車も多くない。多くの人々は歩いている。夜の照明が少なく、石油などエネルギー資源の不足を反映している。われわれが訪問した外国人向けの店やレストランからは一般の人々の生活を想像することは難しい。

北朝鮮の農業生産は90年代半ばの最悪期は脱して、徐々に改善されてきたことは事実のようである。北朝鮮の農業・食料生産を引き上げ安定させるためには、風土にあった農業の研究、水害の被害を最小限にするための植樹、インフラ投資、農民の生産意欲の喚起が不可欠であろう。そのための財政支出の確保も制約が大きいと見られる。ただ農家請負制の実験を極めて限定的ながら昨年から導入しているそうである。ベトナム、アルバニア、ルーマニアなどの例を見ても、集団農場経営を個人農主体の経営請負制に移行した結果、農業生産の急増が見られる。また2002年7月の米の販売価格の50倍もの引き上げや、ここ数年の「改革」「実利」「国営企業における稼ぎ高(付加価値とほぼ同様)指標」の概念の導入など、経済全体の効率化と生産性向上を模索する何らかの動きが見られる。これら一連の動きには価格体制を市場の実情に合わせただけで「経済改革」の名前に値しないという批判もあるが、いかに微温的であっても、「改革」の試みは予期しない変化と新しい展望を生み出す可能性がある。そのなかでケソン工業団地は韓国側が熱心だけに注目する必要がある。

特集 訪朝・訪中

## 友誼賓館に泊まって

高橋 勝幸 (たかはし かつゆき)

朝鮮民主主義人民共和国・平壤から北京に移動し、友誼賓館に1泊した。友誼賓館には一度宿泊したいと思っていた。この友誼賓館にはかつて、政治亡命したタイ人が何世帯か住んでいた。そのうちの3人には以前、バンコクと北京でインタビューしたことがある。一人はラムジアック・サップストーン(旧姓)で、1952年10月、北京で開催されたアジア太平洋地域平和会議に参加した。その後、外文出版社で働き、毛沢東選集のタイ語翻訳などをした。その夫のシティチャイ・ソンカラックは1949年2月26日のプリーディー=パノムヨンによる反政府武装蜂起(「王宮反乱」)に参加し、失敗すると中国に亡命し、北京大学でタイ語を教えた。もう一人はスチャート=プーミボリラックで、現在も北京に住んでいる。

私が訪問団に参加した理由は、タイの朝鮮反戦平和運動に関心をもっているからである。1950年3月にストックホルム・アピールに賛同する原子兵器反対の署名運動が世界各地で始まった。まもなく6月に朝鮮戦争が勃発する。タイ政府は国連の要請に応じて、アジアで最初に派兵した。タイの良識ある人々は10月にストックホルム・アピールの署名運動を開始し、朝鮮戦争に反対した。1952年11月10日より、この運動に関わった多くの人々が逮捕された。最終的に49人が有罪判決を受け、4年半を刑務所で過ごした。

その内の一人、スチャートが友誼賓館に34年間にわたって滞在した。スチャートは1958年8月、中国対外文化交流協会の招待によりタイ国文化促進交流代表団の秘書として訪中した。滞在中の10月にタイでクーデタが発生した。周恩来首相と陳毅外相は団長のクラブ・サーイプラディットと接見し、首相は「あなた方は暫く帰ることができないから、中国に留まってもかまわない。中国を自分の家だと思って下さい」と語ったという。帰国すれば再び逮捕されることから、クラブとスチャートの2人は中国に政治亡命した。実際、帰国した残りの10名、他に訪中したり、かつて平和運動に参加したりした大勢が、クーデタ後に逮捕され6年以上収容された。アジア太平洋地域平和会議に参加し、同年に帰国したプラサート・サップストーン、サグワン・トゥラーラック、スリー=トーンワーニットらも逮捕された。

スチャートは2003年に友誼賓館から北京の高層アパートに居を移した。現在78歳であ



マルキシストにして平和の闘士  
スチャート・プーミボリラック

る。彼は戦後、新聞記者として平和、反戦、タイ軍の朝鮮撤退、ソ連擁護について健筆をふるった。これらの論説は公安から「赤」とであると警告を受け、以後、警察に睨まれた。タイ国平和委員会の活動にも参加し、平和署名を集め、会議に出席した。この度、スチャート氏に再会し、「9条を広める会」設立声明を紹介したところ、「自分はこれまでずっと平和運動家であった」と言って、厳として「9条を支持する宣言」に署名してくれた。思わず握手を交わした。さらに「これに署名しない者は戦争の推進者である」と同席したタイ人留学生2人にも勧めてくれたのである。

特集 訪朝・訪中

---

## 誰に対する「ファシズム」？

---

堀 妙湖（ほり たえこ）

「中国で反日のデモがあった時、日本では盛んに『デモは中国国内の矛盾など、不満の捌け口だ』などと報道されていたが、あれは間違っている。本当の原因は小泉首相の靖国神社参拝だ。」

今回、地球宇宙平和研究所の訪中に、留学先の上海から参加させていただきました。上は、その時に北京大学の日本研究センターの先生が話されていたことです。交流会に参加して考えたこと、それは、日本で一般的に流されている「反日デモ=中国の内部格差隠蔽」説が本当なのかということです。

確かに、「デモの原因は、日本の常任理事国入り反対や歴史問題などではなく、内部格差などの不満や鬱憤を、政府にぶつけられないぶん、反日デモで晴らしている、また、政府もそれを理解している為デモを押さえ込まないのだ」という論には一理あるかもしれませんが。しかし、例えそのような面があったにしても、日本の責任がなくなるわけではありません。

今年9月7日、そのことを考えさせられるような事件に遭遇しました。

その日私は、「中国抗日戦争と世界反ファシズム戦争勝利60周年記念展覧」を見に行っていました。中国人民の日本ファシズムに対する怒りを体いっぱい感じたその帰り、会場である上海博物館中心の目の前にある上海商場（ポートマンホテル）で、反政府集会に遭遇しました。

約50人ほどの人々がポートマンの前に集まり、それをその倍ほどの人々が取り囲んで、なにやら歌やシュプレヒコールを行っていました。近づいて話を聞いてみると、高速道路建設や区画整理などにより、政府に強制的に立ち退かされた人々が、その横暴を訴えているものでした。中には、警官に殴られて怪我をした人、店をつぶされて生計が立てられな

くなった人、そして、何よりも住む家のない人達がいました。彼らが叫んでいたのは、「現代のファシズム反対!」「市民へのテロリズム反対!」「官僚の財産を公開せよ!」というものでした。

私は「ファシズム」という言葉を先ほどまで日本への怒りの言葉として見ていただけに、中国の一般市民が政府に対してファシズムという言葉を使っていたことがとても印象的でした。また集会を禁止している中国で、このような繁華街で集会を行っていることに驚きを感じるとともに、中国市民のたくましさを感じました。

彼らは、しっかりと政府に対して意思表示をしていました。決して日本をその不満の捌け口にはしていませんでした。この集会と反日デモを単純に比べることは出来ないのかもしれないかもしれません。ですが日本と中国の関係を考える上で、このことをしっかりと頭に入れておかなければならないなと改めて感じました。

特集 訪朝・訪中

---

## 「今日のコラム」より

---

地球宇宙平和研究所ウェブサイトの「今日のコラム」のページでは、会員によるコラムが連日発表されています。こちらでは今回の特集に近いテーマのコラムを著者の了解を得て、転載させていただきました。

### 二酔人四方山問答 (13)

投稿者：岩木 秀樹（いわき ひでき）

A：この前、朝鮮民主主義人民共和国に行って来たんだ。

B：え、本当、大丈夫だった。

A：みんなそんな風に言うんだ。行く前から、ちゃんと帰ってこれるのか。拉致されるんじゃないか。などと異口同音に言われたよ。

B：でも今の日朝関係や、世界情勢を見ても、そのような心配は当然出てくると思うよ。

A：それはそうかもしれないし、確かに普通の海外旅行とは少し異なった緊張感があった

---

<http://www.igcpeace.org/mt/colum/>

ことは事実だ。ただ現にこうやって元気に帰って来られたので、そのような心配は杞憂だった。

B：で、どうだった北朝鮮は。

A：その北朝鮮という言い方は、日本では略称として使われがちだけど、蔑称としてのニュアンスも混じっているため、朝鮮民主主義人民共和国では使われず、自分たちのことを共和国などと呼んでいる。ちなみに大韓民国のことは南朝鮮と言っていた。

B：へー、そうなんだ。

A：朝鮮民主主義人民共和国の地図、Map of Korea では、大韓民国を含む朝鮮半島全体が描かれ、南北国境線は他の道の境界線と同じ太さで描かれている。また朝鮮観光地図の朝鮮行政区域図には、朝鮮半島全体が行政区域とされている。

B：で、印象はどうだったの。

A：街はとてもきれいだった。確かに建物は老朽化し、道路もがたがたしているところが多かったけれど、みんな協働で清掃しているからかゴミ一つ落ちていなかった。世界の大会でこんな街もかなり珍しいんじゃないかな。



ホテルより平壤遠景。下は大同江。

B：へー、旅行者を狙うスリなんかはいるの。

A：スリや置き引きやボッタクリのたぐいの心配は全くなかった。旅行者がそのような心配もせずに旅行できる国はこれまた世界でも本当に少ないと思うよ。

B：じゃあ良いことばかりだったの。

A：予想に比べ、かなり快適だったことは事実だ。ホテルも日本と変わりなく、日本のBS放送も見られた。ただ自由な行動があまりとれなかったこと、入国と出国の審査ではスーツケースまで開かれ検査させられたことは残念だった。特に携帯電話を持ち込むことと、印刷物を持ち込むことは非常に神経をとがらせていたようだ。



B：カメラの撮影はどうだった。

A：デジカメやビデオの撮影はほとんど自由だったから、色々なところを取った。ただ私たちが行ったところは、平壤と開城と板門店だけで朝鮮社会のほんの一握りしか見ていないけれど。



平壤の街並み

B：やはりマスコミで報道されているように、かなり貧しい様子だった。

A：地方の様子は分からないけれど、平壤を見た限りではそれほど貧困にあえぐという状況ではなかった。商店やレストランは社会主義経済のせいなのか、看板もでておらずどこにあるのかわかりずらかったけれど、汚い建物をいったん入ると、豪華なレストランがあったりしていた。単に道路から見ていると、商店もレストランもないように見えるが、中にはいるとそれなりに商品が並んでいた。

B：なるほどね。また続きは聞かせてよ。

(つづく)

(投稿日: 2005年9月8日 木曜日)

特集 訪朝・訪中

---

## 訪問日程

---

(2005年8月25日 - 9月2日)

宿泊 平壤 羊角島国際ホテル  
北京 友誼賓館ホテル

- ・ 8月25日(木)  
新潟発(15:40)ウラジオストク経由(ビザ受け取り)平壤着(22時頃)
- ・ 8月26日(金)  
万景台(金日成生家跡)、地下鉄、万寿台大記念碑、凱旋門、刺繍研究所、プエブロ号
- ・ 8月27日(土)  
高句麗東名王古墳、定陵寺、主体思想塔、モラン第1高等中学校、アリラン公演
- ・ 8月28日(日)  
大城山、革命烈士陵、広法寺、祖国解放戦争勝利記念塔、野外青年舞踏会
- ・ 8月29日(月)  
朝鮮社会科学者協会との学术交流、金日成総合大学、トローリーバス乗車、サーカス
- ・ 8月30日(火)  
板門店、開城へ、高麗歴史博物館、王権王陵墓、平壤へ戻り、少年宮
- ・ 8月31日(水)  
平壤発(10:10)国際列車で北京へ
- ・ 9月1日(木)  
北京着(8:30)、天安門、故宮博物院、王府井
- ・ 9月2日(金)  
北京大学日本研究センターとの学术交流、北京発(16:50)成田着(21時頃)

特集 訪朝・訪中

---

## 決算報告

---

### 収入

参加者から研究所への払い込み（9人×10,000円）	90,000円
宴会代負担（2人分）	8,600円
<hr/>	
合計	98,600円

### 支出

8/20	お土産代（クロス・ボールペン3本）	11,025円
8/29	チップ（昼食代・社会学者協会）	20,000円
	*一緒に食事をする時間がなかったので、昼食代としてお渡ししました。	
8/30	チップ（タバコ代・運転手・通訳）	1,890円
8/31	チップ（タバコ代・運転手）	3,000円
8/31	チップ（ガイド・運転手）	2,000円
9/1	チップ（タバコ代・運転手）	2,625円
9/1	宴会代（4,044元×13.822 = 55,896円）	55,896円
9/2	チップ（運転手）	1,500円
<hr/>		
合計		97,936円

収支残高 664円

訪問団参加者は中西治さん以下9名、他に2名が全日程をほぼ共にされ、北京大学日本研究センターでの学術交流会にはさらに3名が加わりました。

---

## 会員紹介

---

渡辺直毅（わたなべ なおき）

渡辺直毅と申します。今年の三月に創価大学大学院博士後期課程を単位取得満期退学し、現在は創価大学で非常勤講師をしております。今年度から改めて同研究所の研究者として、また広報宣伝部部長として名を連ねさせていただくことになりました。よろしく願い致します。私は学部時代は創価大学の林亮先生（本研究所理事）の国際関係論のゼミで学びました。ゼミ幹事としてゼミの仲間と日々楽しくも、切磋琢磨しつつ学びあったことは今思い起しても楽しい、充実した思い出です。卒業論文では、「台湾の内政と外交関係 - 1970年代初頭～1990年代半ばにおける対米・中関係を中心に - 」というテーマで研究しました。1970年代からの米中関係の変遷を研究しているうちに、その交渉過程で必ず取り上げられる台湾問題に関心を持つようになったことがそのきっかけでした。自分で問題を発見し、それを自分で研究していく中で解決していくことの楽しさをつかむことができました。大学院修士課程からは中西ゼミに所属し、中西治先生（本研究所理事長）のもとで学びました。中西先生のもとで学ばせていただいたことは研究上のご指導から人生論に至るまで本当に多くのことを学ばせていただき、その全てをここで申し上げることはできませんが、「平和」がいかに尊いものであるのかということ、「平和」に貢献するために我々が学問を修める意義があること、視野を広く持った研究を行うことの重要性、などがとりわけ私の中に強く銘記されています。



本研究所の設立趣旨には「地球社会の平和に関する分野で研究・教育活動を行うとともに、平和問題に関心のある個人や団体を対象に研究・教育活動を推進し、また国際的な文化学术交流を推進して、地球と宇宙の平和に貢献すること。」とあります。また、本研究所がめざす平和とは、「単に国家間の平和ではなく、地球社会全体さらには宇宙までも含んだ包括的で調和的な平和」とあります。入会当初はその名前のスケールの大きさに驚くと同時に、自分のなかでそれを咀嚼することに正直とまどいを覚えもしましたが、宇宙・地球という大きな視野から人類の「平和」を真摯に考察し、それに基づいて「平和」を確立する営為に努めていくことは、暴力には暴力でこたえるという悪循環が見られ、環境問題が人類にさまざまなかたちで警告をあたえつつある現在、もっとも必要とされていることであると思うようになりました。私自身、学んだことを志を同じくする方々と協力し、本研究所を通してその成果を社会に還元していくことができることを嬉しく思うと同時に、誇らしく感じております。

現在私は、「台湾におけるナショナル・アイデンティティの形成過程」をその「包摂」と「排除」という視点から、日本統治期における抗日運動から台湾における戦後初期（二・二八事件）にいたるまでの期間において考察する研究をしています。この研究には人と人とがいかに結びつくのか、あるいは、いかに決裂するのかという「平和」を考える上である意味根本的な問題を考えさせる糸口や、現在のアジアにおける「平和」を台湾の視点からどう見るのかという問題関心が含まれているように感じます。昨年の本研所有志による訪中団に参加し、中国の研究者の方々や学生とのシンポジウムに出席するなかで、お互いによく知りあい、理解しあい、お互いの生活、文化、歴史を尊重しあうことの大切さを実感しました。今後は本研究所の発展に向けて、こうした広くアジアの平和という観点からの研究成果を生み出しながらも尽力していきたいと考えています。ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

---

## 事務局からのお知らせ

---

### 研究所報の発行について

学術研究委員会の今後の活動として、研究部では研究所報を発行することになりました。会員の研究成果の公開と対外的アピールを目的とし、学術論文集の体裁をとります。執筆要項や特集テーマは追って皆さんにお知らせいたします。原稿締め切りは2005年12月末日で2006年3月発行を予定しています。

### 地球宇宙平和学叢書および新版ブックレットの発刊について

出版部では、地球宇宙平和学叢書と新版ブックレットの発刊を検討しています。

### 今後の予定

2005年11月27日(日) かながわ県民センター、711号室

14:00-15:00 理事会

15:30-18:00 朝鮮中国訪問報告会・戦後60年合同研究会(仮称)

2006年1月 新春講演会

2006年2月 研究合宿

2006年3~4月 中華人民共和国訪問

## 地球宇宙平和研究所入会の案内

研究所の趣旨に賛同し、入会される方を広く募集いたしております。会員の方もご友人、ご家族等に紹介していただければ幸いです。入会希望の方は事務局まで連絡下さい。

- ・正会員（総会での議決権あり） 入会金 5,000円 年会費 5,000円
- ・賛助会員 入会金 2,000円 年会費 3,000円

## 振り込み先

- ・銀行振り込み 三井住友銀行三鷹支店（普）1700950  
名義人：特定非営利活動法人地球宇宙平和研究所
- ・郵便振り込み 郵便振替口座番号 00120-7-16913  
口座名称：特定非営利活動法人地球宇宙平和研究所

## 事務局

事務局への連絡は以下へお願いします。

岩木秀樹 メール: [hiiwaki@f4.dion.ne.jp](mailto:hiiwaki@f4.dion.ne.jp)  
電話・ファックス: 0426-54-8505  
住所: 193-0801 八王子市川口町 1607-1 サウスポート 203号





特定非営利活動法人 地球宇宙平和研究所  
ニュースレター 第9号

発行人 中西 治

発行所 特定非営利活動法人 地球宇宙平和研究所

〒235-0045

神奈川県横浜市磯子区洋光台 1-9-3

URL: <http://www.igcpeace.org/>

E-mail: [info@igcpeace.org](mailto:info@igcpeace.org)

発行日 2005年10月1日

編集人 遠藤 美純

頒 価 100円